琉球新聞　第3種郵便物認可

共に考える住宅デザイン

○123○

甲斐　徹郎

住まいの中のパブリック

個より共生の場に豊かさ

家族が憩う空間を創造

昔、多くの家で当たり前に存在していた「家族の団欒」が、現代の住まいの中から失われつつあるように思います。その理由は、住まいのカタチが変化したからだと思います。昔の住まいは「家族」を単位として造られていましたが、現代では「個人」を単位とする傾向が強くなりました。

私が中学生だった三十年前を思い起こしてみると、例えば音楽を聴くためのステレオは応接間の中央に鎮座していました。音楽を聴くという娯楽は「家族」が単位だったのです。テレビも電話も一家に一台が当たり前で、どれも家族単位で使っていました。それが、やがて、ミニコンポが自分の個室に備えられ、さらには、ヘッドホンステレオとして携帯されるようになりました。電話は、子機が個室に引かれ、それが、今では携帯電話になりました。

というように、住まいづくりの場面では、その前提となる単位が「家族」から「個人」へと変わってきているのです。その結果が「家族団欒」が失われることにつながっているのだと思います。

こうして造られる現代の住まいのカタチは、子どもに大きな影響を与えています。子どもにとって、自分の個室空間が「個人」の単位ですべて充足してしまえば、外との関係を持つことの必然性がなくなってきます。そのことが、例えば「ひきこもり」などの問題を引き起こす一因となっているのではないかと思います。

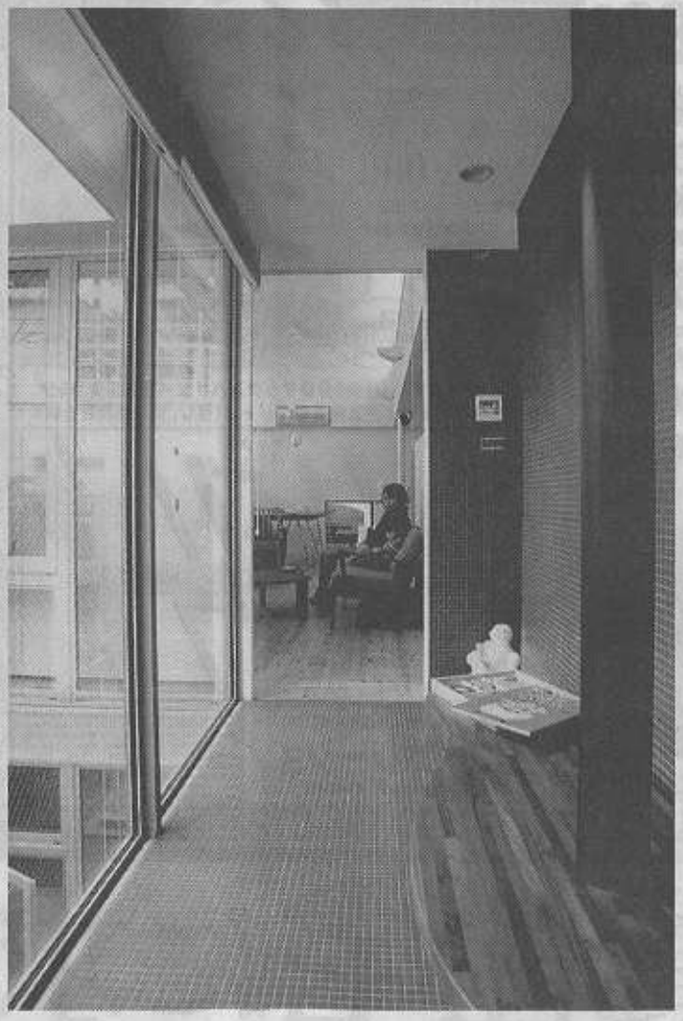
こうした問題意識を持ちながら、私がプロデュースした住まいをご紹介したいと思います。二〇〇四年秋に完成した松井さんのお宅です。松井さんの住まいづくりで重視されたことは、一歳の娘さんの成長を育むために「家のカタチが家族の関係を規定する」という考えに基づいて空間をデザインするということでした。

そのポイントは、家族にとってのパブリック機能を充実させるということです。自分の部屋に閉じこもっているよりも、住まいの中の「パブリック」にいた方が豊かであること。豊かさは、ひとりっきりの空間からは生まれないということ。そうしたことがこの家での常識となるように空間は追求されました。

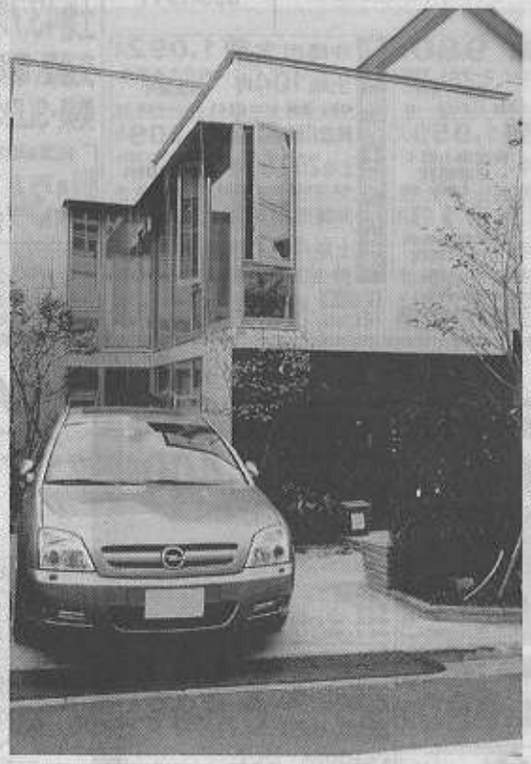
そのメーンとなるのが「パブリックとしてのバスルーム」です。ここのバスルームは、南国の植物が冬の乾いた空気を潤し、マイナスイオンを生成する「空気浄化装置」であり、自然の恵みを蓄えリビングにその恵みを供給する「空調装置」であり、家族の憩いの「アトリウムガーデン」である、というように造られました。

子どもの成長過程が、親への「依存」関係から、やがて「自立」、そして「孤立」へと向かうのではなく、「依存」→「自立」→「共生」というプロセスが生まれるような住まいづくりのあり方が重要なのだと思います。

（マーケティング・コンサルタント）



家族にとっての「パブリック機能」を重視して造られたバスルーム。奥のリビングとつながったアトリウムガーデンとなっている



松井さん宅の外観（東京・世田谷）